

古文解釈の視点

—生きた読みをめざして—

国語教育専修 弓 削 繁

1 はじめに

論者は中世文学研究に携わることから、ここ十年来は小学校教員免許に必須の「教科国語」や、10年経験者研修（12年目研修）および6年目研修（高校国語教員対象）、教員免許状更新講習などの一部を担当してきた。その内容の一端を講義資料の目次によって示すと次のようなものである。

教科国語（全30時間中6時間担当）

- I. 古典（を読むこと、学ぶこと）の意義
 - II. 新しい学習指導要領について
 - III. 入門期の古典学習—古典ぎらいにさせないために
 - IV. 確かな教材分析を（古文を解釈すること）
- 付. ことばを遡る

教員免許状更新講習（6時間担当）

- 一 生きた読みをめざして
- 二 教訓読みに陥っていないか
- 三 レッテル貼りをしていないか
- 四 現代語訳が最終目的になっていないか
- 五 歴史的・文化的な背景の中で理解しているか

教科国語は2年生の学生が対象であるが、この講義では主に入門期の生徒を古典嫌いにさせないためにはどうしたらよいかということについて考え、6年目研修・12年目研修・教員免許更新講習では、現職教員に文字テキストから表現世界を生き生きと立ち上がらせる現実的な読みの視点・方法について愚見を述べてきた。

ところで、周知のとおり2006年12月に改正教育基本法が公布・施行され、ついで2009年4月に改正学校教育法が施行され、それに伴い学習指導要領も改訂されることとなった。小学校は2011年、中学校は2012年、高等学校は2013年（学年進行）から実施される運びである。そこで、これを国語古文に関する指導内容に注目してみると、まず現行の「言語事項」に代わり「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」が立てられたのが注意される。これは、改正教育基本法以下に謳われている「伝統と文化の尊重」という目標に見合うものであり、今後改めて古典・古文の意義が見直され、「国語」の重要な一角を担うものになることは間違いないところである。すなわち、新学習指導要領では早くも小学校の第1学年及び第2学年から「昔話や神話・伝承などの本や文章の読み聞かせを聞いたり、発表し合ったりすること」が求められ、中学校（第2学年）では、「古典に表れたものの見方や考えた方に触れ、登場人物や作者の思いなどを想像すること」、高等学校の共通必修科目である「国語総合」では「言語文化の特質や我が国の文化と外国の文化との関係について気づき、伝統的な言語文化への興味・関心を広げること」、更に「古典を読む能力を養うことを中心的なねらい」とする「古典B」では、「古典を読んで、内容を構成や展開に即して的確にとらえること」というように、次第に高度な教育が要求されている。因みに、「高等学校指導要領解説」によれば、

「言語文化の特質」とは、我が国の言語文化の独自の性格やその価値のことであり、微視的には、作品一つ一つに表れた個性と価値、巨視的には作品を集会的にとらえた時代全体の特徴、さらに現代につながる日本文化全体の独自性のことである。

という。

然るに、果して国語教師のすべてがこのようにして準備された古文の教材を十分に消化し、適切で魅力的な授業を展開することができるかという点必ずしも不安がないわけではない。そこでは広く豊かな知識・教養と的確に本文を読み解く力量が問われるからである。

そこで、本稿ではこのような古典・古文をめぐる教育の動向に鑑み、主に中学校・高等学校の国語教員の教材研究の一助として、古文の読み解き方について常々考えているところを述べておきたい。

2 テキストを立ち上げる

まず中学校3年生および高等学校「国語総合」の定番教材から、『奥の細道』の平泉のくだりを俎上に載せることとし、光村図書の「中学三年国語」によってその本文を掲出する。

三代の栄耀一睡のうちにして、大門の跡は一里こなたにあり。秀衡が跡は田野になりて、金鶏山のみ形を残す。まづ、高館に登れば、北上川南部より流るる大河なり。衣川は、和泉が城をめぐるて、高館の下にて大河に落ち入る。泰衡らが旧跡は、衣が関を隔てて南部をさし固め、夷を防ぐと見えたり。さても義臣をすぐつてこの城にこもり、功名一時の叢となる。

「国敗れて山河あり、城春にして草青みたり」と笠打ち敷きて、時のうつるまで泪を落としはべりぬ。

夏草や兵どもが夢の跡

卯の花に兼房見ゆる白毛かな 曾良

以下、この教材により文字テキストから場面を生き生きと立ち上がらせる読みを試みる。論者は数年前ある中学校でこの教材による研究授業を参観したことがあるが、その授業は原文の表現に即して芭蕉の心情に迫ろうという目的のもと、生徒を数名ずつ班分けにし、予め班毎に課題を与えておいて図書やインターネット等で調べ学習をさせ、教師が各班の報告を集約しつつ問題の輪郭を鮮明にさせていくという形で進められていた。これはテーマといい方法といい、典型的な古文学習の一つであり、実際に授業は表面的にみるかぎり自然に対する人間の営みの儚さや愚かさ、自然が人事を飲み込んでいく非情さなどを理解させて所期の目的を達しているように見受けられた。しかし、深いところで教師がどれだけこのテキストを理解しているかというといささか気にかかる場所があった。果して、授業後の研究会の場で芭蕉の句に詠まれている夏草はいつ頃のどのような(状態の)草かと尋ねてみたが、当の教師から明確な回答が返ってこなかった。

「いつ頃の」という問いに対しては、芭蕉が平泉を訪れた日にちを調べればよい。『奥の細道』という作品世界でなら、前後の叙述から元禄二年の五月十四日のことと読めるし、芭蕉の旅に随行した曾良の日記(『曾良旅日記』)によれば五月十三日ということになる。しかし、ここで注意すべきはこの日にちをそのまま現在の日にちと同一に扱ってはならないということである。旧暦(太陰暦)と新暦(太陽暦)では通常1ヶ月前後のズレがあるからである。内田正男『日本暦日原典』によれば、この年の五月十三日は新暦の六月二十九日に相当する。とすれば、その頃の草はどのような状態であっただろうか。光村図書の旧版の学習指導書には「夏草や」の句に、

ここには夏草が生い茂っている。ここは昔、多くの武人たちが功名を夢みて戦ったところである。しかし、彼らの野望も栄華もむなしく一場の夢となり、今は夏草がぼうぼうと生い茂っていることよ、という意。「草青みたり」と「夏草」、「義臣すぐつて」と「兵ども」、「一睡のうち」と「夢」とがそれぞれ響き合っている。(傍点、論者)

という解説が付されている。しかし、傍点部の表現からイメージされるものは真夏の成長しきった草であり、

これでは本文に「草青みたり」とあるところと齟齬することになる。恐らく現場の教師の多くも真夏の草を想像しているのではないかと推されるが、そうだとすればそれは正しい理解ではあるまい。すなわち「桜前線」と同じで、都と平泉とでは緯度が違うし、元禄二年（1689）と今とでは気象条件もかなり違っていたはずである。義経を庇い白髪を振り乱し奮戦して果てた兼房を偲んで曾良が「卯の花に」の句を詠んだのも、都では卯月（四月）に咲くはずの卯の花が平泉ではまだ咲いていて、そこに兼房の幻影をみたからに違いない。白く乱れ咲く卯の花を老人の白髪に見立てるのは、

卯の花のみなしらがとも見ゆるかな賤が垣根はとしよりにけり

という源俊頼の隠題の歌に先例があり、恐らく曾良の句はこの歌に想を得たものでもあろう。これらの点を勘案すれば、六月二十九日とはいえ、芭蕉が見ていたのは、真夏の成長しきった草ではなく今まさに勢いよく伸びつつある青々とした草であったはずである。光村の指導書は、芭蕉が杜甫の「春望」の詩句「城春にして草木深し」を「城春にして草青みたり」と改変して引用している点について、

「草木」の「木」を削り、「草」だけを強調することによって、前述の「叢となる」と、あとの句の「夏草や」との関連をつけているようである。

と説いているが、この改変はむしろ「城春にして」という言葉のとおり、まだ「春」のごとき实景に就いたためであろう（因みに、芭蕉の「泪」も曾良の句も、杜甫「春望」の「時に感じては花にも涙を濺ぎ」、「白頭搔けば更に短く」という表現に触発されてもいよう）。

要するに、ここは、眼前まさに人事を覆い尽くしつつある草（自然の営み）、その進行性と非情さに注意してはじめて、芭蕉の眼から溢れ出た泪が、自然の生命力の前に儂く覆い隠されていく小さな人間の営みに対する愛惜の情に発するものであったことを生き生きと実感することができるのである。

単に語句や事柄の意味を追いつつ梗概を辿るだけなら無味乾燥な授業に陥ってしまう。文字テキストから如何に瑞々しく世界を立ち上げて見せるか、それには何よりも語句や表現を現実に即して丹念に読み解いていくことが大切なのである。

3 場面の再現

本文に生命を通わせる上で次に大切なことは、場面や状況を現実に照らしてしっかりと押さえてかかることである。本節ではそのことを『建礼門院右京大夫集』9～11番の花見記事の解釈をとおして述べておきたい（この記事の作品論的な読みの詳細については旧稿『建礼門院右京大夫集』小考—11番歌の意味するもの— 岐阜大学教育学部研究報告—人文科学—、第42巻第2号を参照されたい）。

近衛殿、二位中将と申しし頃、隆房、重衡、維盛、資盛などの殿上人なりし、引き具せさせ給ひて、
白河殿の女房たちさそひて、所々の花御覧じけるとて、又の日、花の枝のなべてならぬを、花見ける人々の中よりとて、中宮の御方へまゐらせられたりしかば、

9 さそはれぬ憂さも忘れてひと枝の花にそみつる雲のうへ人

返事 隆房の少将

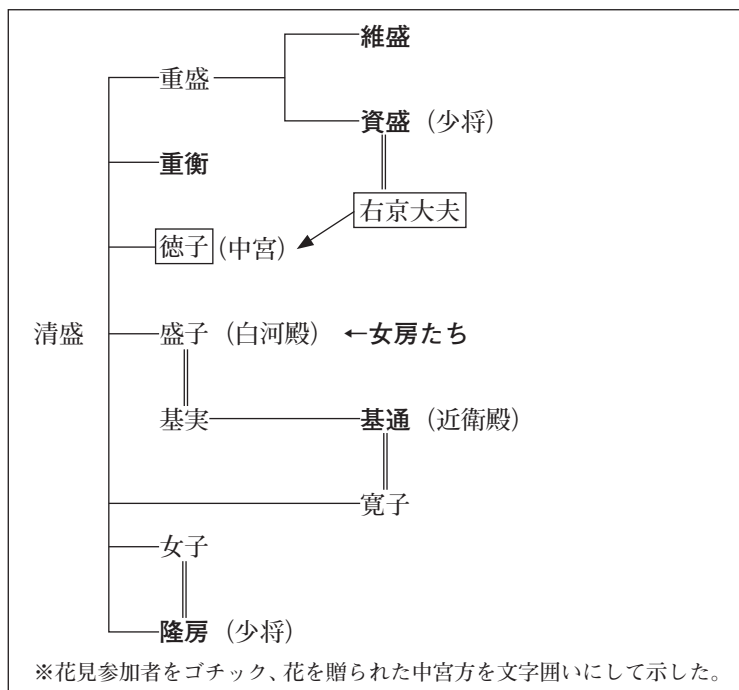
10 雲のうへに色そへよとて一枝を折りつる花のかひもあるかな

資盛の少将

11 もろともに尋ねてをみよ一枝の花に心のげにもうつらば

これは、近衛基通が平家ゆかりの貴公子や白河殿盛子のもとの女房たちを誘って花見に出かけた折の贈答記事であり、事の概要は辞書などで語句や人物を調べれば容易に理解することができる。しかし、現代語訳しただけでは、ここでなぜ右京大夫がお礼の歌を詠み、その「返事」を隆房と資盛の二人がしているのか、そもそもこの贈答記事にはどのような意味（作品論的な）があるのかといったことまでは分からない。

一般に贈答歌の場合、相手から一首贈られてくれば一首返し、二首贈られてくれば二首返すというように



贈歌の数に応じて答歌を返すのが習わしである。しかし、ここでは9番の歌に対して10番と11番の二首が返ってきていささか異例である。この点について、糸賀きみ江（新潮日本古典集成『建礼門院右京大夫集』）は、

右京大夫が詠んだ九の歌に対して二首も返歌が来る必要はないので、資盛の歌は右京大夫に対する個人的な恋慕の情からという説がある（評説）。しかしここは「中宮の御方へ」贈られた桜の一枝をめぐる、中宮付き女房対殿上人の公的な贈答の挨拶であろう。

と説明しているが、この解釈はいかがであろうか。

そこで、まず花見の行われた年次を検証してみるが、これは参加者の官職表記から容易に推定することができる。すなわち、『公卿補任』を徴すれば、基通が二位中将だったのは安元二年（1176）三月六日から治承三年（1179）十一月十七日の間、隆房が少将だったのは仁安元年（1166）六月六日から治承三年十一月十七日の間、資盛が少将だったのは治承二年十二月二十四日から養和元年（1181）十月二十九日の間であるから、花見の時期はこの三つの条件を満たす治承二年か三年ということになる。そして、このうち桜の季節ということから、治承三年（1179）に限定されてくるのである。然るに、不思議なことに実際にはそうはならないのである。123～125番記事によれば、右京大夫は中宮が言仁親王（のちの安徳天皇）を生む治承二年の秋の頃に宮仕えを退いていたからである。

この矛盾を合理的に理解するとすれば、つまるところ時期推定の根拠にした「資盛の少将」という記述を疑うほかないのである。そこで直前の8番記事をみると、それは建春門院滋子の一周忌法要を叙した安元三年（1177）七月七日の記事であり、この作品の編年性を考えると、この花見記事はほぼ治承二年春のこととして扱われていることが知られるのである。

次に、桜の一枝をめぐる歌の贈答場面を具体的に再現してみよう。花見に出かけた基通方から中宮様の御方へ桜の一枝が届けられた、その時9番のお礼の歌を詠んだのは作者右京大夫であるが、彼女とて一女房として差し出がましい行動はできないはずであるから、これは中宮の命によるものと考えて間違いのないところである（そこには読み手に選ばれた作者の自負が透けてみえる）。花を届けにきた使者はお礼の歌を受け取って帰ると、今度は返歌を届けにやってくる。10番の返歌は同様に基通が歌のうまい隆房に命じて詠ませたものであろう。こう考えれば確かに9番歌と10番歌は中宮方と基通方との「公的な贈答の挨拶」と見ることができる。それでは11番歌はどうか。これは資盛の歌であるが、そもそも資盛はこの歌をどのようにして右京大夫に手渡すことができたのであろう。花を届けた時応対に出てきて9番歌を詠んだのは右京大夫であったが、それを知ることができたのは使いに立った者以外にはないはずである。つまりその使者こそ資盛その人だったのである。資盛は折り返し10番の歌を預かって持参するが、右京大夫に何らかの興味を抱いた資盛は、その際意味ありげな11番歌を密かに手渡したのであろう。そのような場面を想定するなら、ここはやはり恋の始まりを予感させる私的な歌と考えなければならない。

いったい作品全体を見渡してみると、資盛という具体名が記されているのはここだけで、あとは「とかく物思はせし人」（76番）、「波に入りにし人」（258番）、「さめやらぬ夢と思ふ人」（327番）などと二人の間で

閉じた言い方がなされている。また、周知のとおり「少将」とは近衛府の少将で、家柄と教養と美貌と三拍子揃った人物として王朝物語以来恋物語の主人公というイメージが形成されている。これらの点を考えれば、実際二人の恋がこの時から始まったかどうかは別にして、初出箇所資盛の名を明示し、しかも当時まだ侍従に過ぎなかった官職を「少将」と書きなすところからは、自分と資盛をめぐる悲劇を王朝物語の如く理想化して語ろうとする意図が読み取られてくるのである。

如上、これを現代語訳で諒とするなら、具体的・立体的な世界は立ち上がってこない。それ故に国語教師には常に現代語訳が最終目的になっていないかと自問してほしいのである。

4 歴史と文化の場の中で

次に、『建礼門院右京大夫集』からもう一例取り上げて、所与のテキストを当時の歴史や文化の中にかえして読むことの必要性についてみておきたい。

八島のおとどとかや、このごろ人は聞ゆめる、その人の中納言と申しし頃、櫛をこひ聞えたりしを、たぶとて、紅の薄様に、あしわけ小舟むすびたる櫛さしたるが、なのめならぬに、書いておしつけられたりし。

59 あしわけのさはるをぶねにくれなるふかき心をよするとをしれ

かへし 白き薄様に書いて

60 あしわけて心よせけるをぶねともくれなるふかきいろにてぞしる

ここは五節に右京大夫が宗盛から櫛をプレゼントされた折のことを叙した一節である。まず、右京大夫は宗盛に櫛をおねだりしていたというのが、そのことを理解するには当時の風習を知る必要がある。すなわち、史料を徴すると、例えば『建武年中行事』に

けふ（寅日）御前の試あり。御殿のひさしに乱舞あり。櫛などぞをくめる。

とあり、『明月記』（建仁元年十一月二十一日条）に、

秉燭以後参院。逢少納言内侍。進入恒例櫛〈今年不出仕、雖無其謂、此事已為毎年事。仍成恐、構出也〉。とあって、当時天皇が五節の舞姫に櫛を贈る習わしがあり、それが一般の貴族にまで及んでいたことが知られるのである。このような風俗を押さえてはじめてこれが五節の日の出来事であったことや、右京大夫が櫛をねだったことの必然性が理解されてくるのである。

さて、宗盛は右京大夫に「葦分け小舟」（葦間を分けて進む小舟の意で、障害の多い恋を象徴している）の模様を象嵌した櫛を、「紅の薄様」（薄様は薄い鳥の子紙）に挿し、59の歌を添えて贈っているが、ここからは右京大夫に資盛という恋人がいることを承知の上で、熱い思いを寄せていることが知られる。

これに対し右京大夫は、あなたの気持ちはようわかりましたというお礼の歌を返しているが、歌意を文字通りにとれば右京大夫は宗盛の熱い思いを受け入れたことになる。しかし、それは本心かという答えは否である。この歌の真意はお気持ちだけありがたく頂戴しましたというところにあるのであり、それは返しに「白き薄様」が用いられていることから知られる。「白」は醒めた気持ちを象徴する色である（同じ紅の薄様で返していれば右京大夫の心も真っ赤に燃えていたことになり二人の恋は成就する）。と同時にこの料紙は、

五節には、「白薄様・こせんじの紙・巻上の筆、軀絵かいたる筆の軸」など、さまざま面白き事のみこそうたひ舞はるゝに（『平家物語』巻一「殿上闇討」）

などとあるとおり五節にゆかりのものでもあったのである。このように理解して、右京大夫の、場をわきまえた粋な振舞いが理解されてくるのである。

因みに、それでは宗盛は本気だったのかということこれも否である。人（特に女性）に贈りものをする場合、あなただけです、あなた一筋ですとって贈るのが礼儀というものであり、右京大夫も勿論そんなことは百

も承知だったのである（これは今のバレンタインデーを比定すれば理解しやすいであろう）。

このようにテキストを歴史や文化の場に戻して読んでみると、長い年月の中で見えなくなってしまったものが甦ってきて、人々の息づかいのようなものまでが感じ取られてくるのである。そうなれば古典は決して干からびた過去の遺産ではなく、私たちにとって身近なものになってくるであろう。

5 小間切れ教材の限界

おわりに、教科書に取り上げられた教材だけではテキストの理解にも学習指導にも自ずと限界があるということを描きおきたい。

いま古典の教材について、新学習指導要領の指示するところを高校「古典B」についてみると、

教材は、言語文化の変遷について理解を深める学習に資するよう、文種や形態、長短や難易などに配慮して適当な部分を取り上げること。

とされている、もっとも詳しく古典を扱う「古典B」においてさえ「適当な部分」がとりあげられるに過ぎない。1400年間もの長きにわたる文学史からバランスよく教材を選ぶとなればそれは仕方のないことではあるが、小間切れ教材では重要な事柄がこぼれ落ちてしまうのもまた確かである。

そのことを上掲の59・60番の櫛をめぐる宗盛との贈答記事によって改めて例証すると、この記事は重盛・宗盛兄弟が左右大将に並び立ったことを叙した57番記事を起点にし、58番記事で兄の重盛が凛々しく立ち働いた五節の頃の内裏近くの火事のことを叙したのを受けるもので、如上宗盛と作者との恋めいたやりとりをその内容とする。しかし、これらは前振りに過ぎず、本題は資盛との恋を語る次の61番記事にあるのである（資盛へと集約されていく配列・構想については、野沢拓夫の卓論「建礼門院右京大夫集管見—前半の主題と構想—」語文、第51輯、がある）。

なにとなく見聞くごとに心うちやりて過ぐしつつ、なべての人のやうにはあらじと思ひしを、あさゆふ、女どちのやうにまじりゐて、みかはす人あまたありし中に、とりわきてとかくいひしを、あままじきことやと、人のことを見聞きても思ひしかど、契りとかやはのがれがたくて、思ひのほか物思はしきことそひて、さまざま思ひみだれし頃、里にてはるかに西の方をながめやる、こず糸は夕日のいろしづみてあはれなるに、またかきくらししぐるるを見るにも、

61夕日うつるこず糸の色のしぐるるに心もやがてかきくらすかな

右京大夫が資盛と恋に落ちたことを告白するのはここが最初であり、57番記事から60番記事まではその導入の働きを担っていたのである。そのことはこの一連の記事が、

57重盛・宗盛兄弟→58重盛→59・60宗盛・作者→61作者・資盛

という人物の連鎖や、

58五節の火事→59・60五節の恋めいた贈答

という場面（五節）の繋がり、更には

58「火の事」「もゆる」→59・60「くれなゐのふかき心」（真っ赤に燃える恋の火）→61「物思はしきこと」（恋の物思い）

という表現上の展開、を以て形成されていることをみれば明らかであろう。

然るに、教科書教材のようにこれら一連の記事から一部分だけを切り出して読むとすれば、このような構想や表現上の意図を理解することは出来なくなるのである。部分は全体の構想を支え、有機的な関連性をもって主題に奉仕しているのだということを考えるなら、いまの教科書がいかに無謀であるか分かつというものである。

再び「古典B」の指導要領を参観すると、そこでは「内容を的確にとらえることに関する指導事項」として、「古典を読んで、内容を構成や展開に即して的確にとらえること」が求められており、新指導要領解説

では、

「構成や展開に即して」とは、内容や要旨を本文の叙述を離れて観念的にとらえたり、部分にこだわり生徒が読みを狭めたりすることがないようにということである。

と解説されている。勿論ここでいう「構成や展開」は作品全体に係るものではなく、教材（切り出された本文）の範囲を越えるものではないのであろう。然るに、上述のとおりその小間切れテキスト自体作品全体の主題と構想を担っているわけであり、そうである限りいくら本文を正確に読み解いたとしても断片テキストにはおのずと限界があるのである。

教材研究や学習指導にあたってはこのことに自覚的でなければならない。そうでなければ木っ端を拾うて材木を流す愚に甘んじることになりかねないであろう。

